

◆ 重点普及課題

ヤイトハタ小型種苗の寄生虫対策試験

八重山農林水産振興センター 知名真智子

1. 目的

八重山地区のヤイトハタ養殖においては、外部寄生虫（特にエラムシ）による種苗配布直後の減耗が激しい。このため、近年は、寄生虫にある程度対抗できる大型（70mm）種苗の配布を実施している。一方で、種苗代を安く押さえるために、小型種苗の配布を希望する生産者は多い。

八重山地区では、これまでは寄生虫対策が十分になされていなかった。しかし、昨年度からは、普及指導員の指導の下、淡水浴などによる寄生虫対策を実施する生産者が増えており、効果をあげている。寄生虫に対する生産者の意識と管理技術が向上していることから、小型種苗で配布した場合においても生残率向上が期待される。

このようなことから、今後の小型種苗配布を検討するために、適正な管理（外部寄生虫対策、給餌管理）をすることで、小型種苗でも十分な生残が望めるか（うまく養殖ができるか）を検証した。

2. 方法

八島魚類養殖場において、ヤイトハタ小型種苗の養殖試験を実施した。

飼育管理者：生産者（3名、各1面）

普及指導員 1面

飼育種苗：ヤイトハタ 全長 50 mm

（種苗配布元：水研センター石垣支所）

収容数：2,000尾／生簀

（普及員管理分は1,600尾）

給餌飼料：配合飼料（ノヴァ EP 0～1号）

飼育期間：平成23年5月18日より約2ヶ月間

試験期間中の給餌作業や網換え、寄生虫駆除作業は、各飼育管理者が行った。また、毎日の給餌量や斃死数など、養殖記録簿の記入も実施しても

らった。

3. 結果

飼育終了時の生残率は、最も成績の良かった順に、85.0%（1,700尾）、52.5%（1,050尾）、32.0%（641尾）であった。普及指導員管理分は71.0%（1,136尾）であった。飼育開始前にウイルス性神経壊死症（VNN）による斃死が確認されていたこともあり、飼育開始から10日間程度はVNNが、それ以降は外部寄生虫の寄生（ハダムシやエラムシ）が主な斃死原因であった。

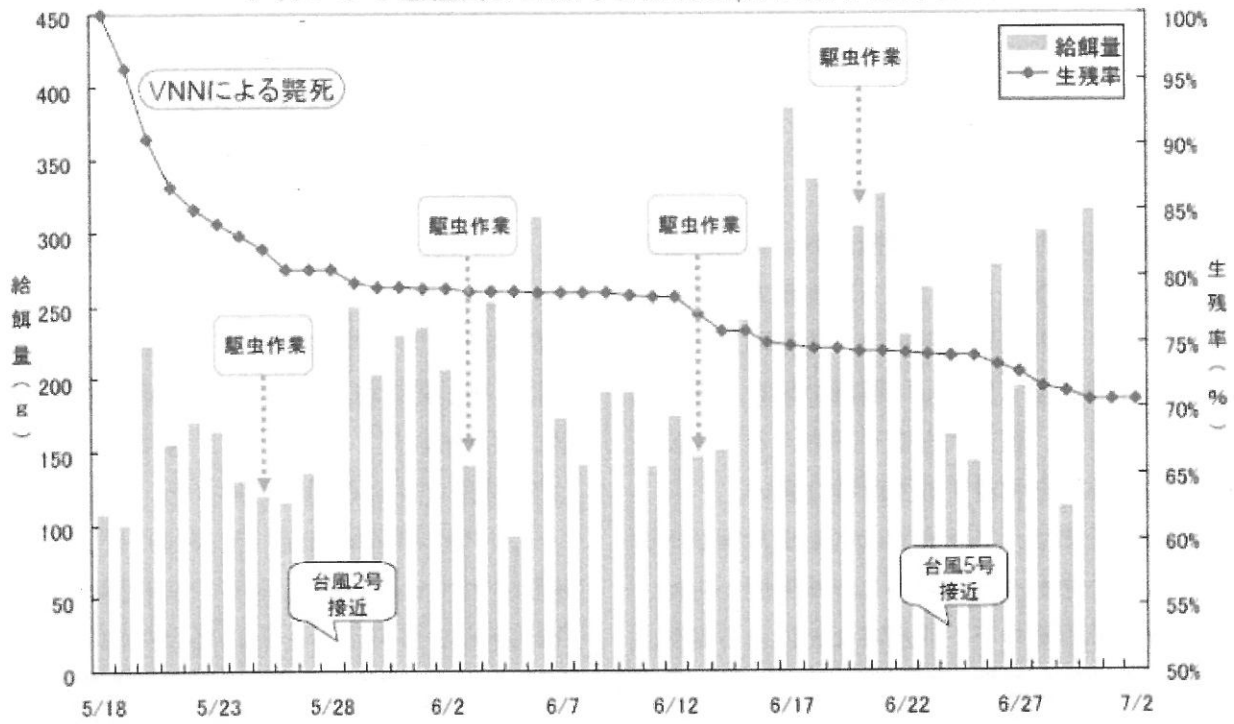
飼育開始から約1週間経過したところから、ハダムシ等の外部寄生虫の寄生が確認された。このため、淡水浴などによる寄生虫駆除作業を5～7日に1度の頻度で繰り返し実施した。

4. 考察

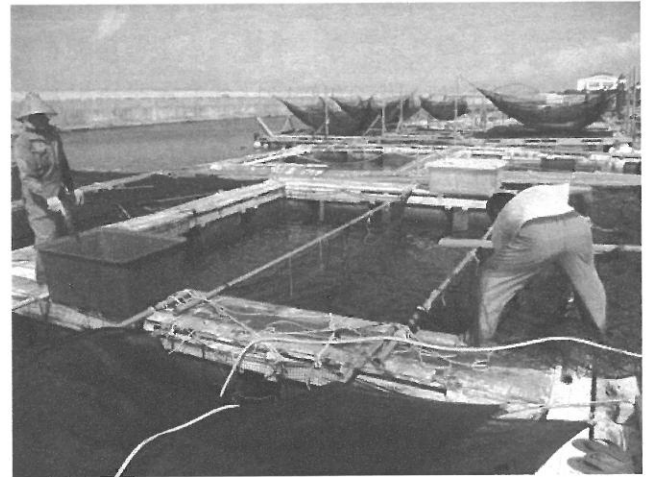
本試験の実施と同じ時期に配布された70mm種苗生残率が平均40%程度であったことを考慮すると、小型種苗の生残率は決して悪いものではない。漁業者により生残率に差が生じたものの、50mm種苗を導入しても十分な生残率を見込めることが実感できた。

生残率が大きく異なった原因としては、①給餌頻度、②寄生虫駆除作業時の手際、③魚の体調変化への気づき、などが考えられた。生残率の高い漁業者ほど種苗期の給餌頻度が多く、給餌にかかる時間が長いようであった。じっくりと時間をかけて給餌することで、種苗を観察する時間が長くなり、それゆえに魚の体調変化に気づきやすくなる。このため、迅速で適切な対処（駆虫作業や給餌調整など）ができ、生残率向上に繋がるのであろう。

ヤイトハタ小型種苗の生残率と給餌量(普及指導員管理分)



50mm小型種苗



生産者による寄生虫駆除作業